

新疆「バレン郷事件」考

水谷 尚子

はじめに

1949年中国共産党が実効支配を始め、1955年新疆ウイグル自治区が成立して今日に至るまでの新疆では、その地の主体民族であるウイグル人によって反政府運動や暴動が幾度となく繰り返されてきた。記憶に新しいところでは、2009年「ウルムチ事件」や1997年「イリ〔ウイグル語でグルジャ〕事件」などがある。

新疆ウイグル自治区で発生したウイグル人による反政府暴動の中でも、1989年第二次天安門事件の翌年、1990年にクズルス・クルグズ自治州アクト県バレン郷で発生した大規模な武装蜂起は、鎮圧に人民解放軍や武警、新疆生産建設兵団所属の民兵が動員され、政府側兵士にも蜂起した民衆側にも多くの死者を出した凄惨な事件であった。この「バレン郷事件」はその後の中国共産党による新疆統治や在外ウイグル人の組織活動など、多方面に於いて大きな影響を与えたことで特筆に値するが、日本ではまったく知られていないと言っても過言ではない。

同事件について日本で最も早い時期に事件の経緯を記したのは、筑波大学のモンゴル研究者楠木賢道であった。楠木の論考「私の新疆見聞録（一）一九九〇年四月のアクト県バレン郷の事件をめぐる」は、氏がウルムチ留学中に見聞した情報と日中両国メディアで報道された内容をもとに、帰国した2年後に事件経過を発表したもので、事件当時の緊迫した空気が行間から滲み出る文章となっている。しかし、当時の様々な報道は実際に現場に赴いて取材をしたものではなく、全て中国政府の「大本営発表」であったことを思えば、再度検証する作業も意義があろう。

本稿では、事件発生から約15年を経た間に出版された漢語諸文献、ウイグル人亡命者が編纂したウイグル語出版物、事件当時を知る証言者の口述回想を中心に、バレン郷事件の経緯とその背景、事件の詳細について考察し、新疆ウイグル自治区に於ける民族問題を理解する一助としていきたい。

I バレン郷事件の発生まで

1) バレン郷について

1990年4月5日朝ウイグル人農村青年たちが武装蜂起した村落、バレン郷について簡単に述べる。なお中国に於いては、行政単位の郷と村は同じではなく、郷の下にさらに村

が存在する。ここでは便宜上日本であまり耳慣れない「郷」を使うこととする。

バレン郷のあるアクト県は、新疆ウイグル自治区成立1年前の1954年にカシュガル地区イェンギサルの所属から行政区画がクズルス・クルグズ自治州所属と変わり、地図を見るとアクト県辺りだけが「飛び地」の様になっている。名称は「クズルス・クルグズ自治州」であるが、総人口はクルグズ人よりもウイグル人が多く、アクト県も同様にクルグズ人よりウイグル人が多い¹⁾。

バレン郷の旧名はコナ・コルガン [Kona Qorghan ウイグル語で「古い要塞」の意]。アクト県の中心部から西南に約17 km離れ、面積は1087 平方キロ。事件が発生した1990年の人口は19690 人。バレンの郷民のほとんどがウイグル人で、一部がクルグズ人だった²⁾。1959 年以降から改革開放が始まるまでの間、人民公社と14 の大隊、63 の小隊で編成されていた。1982 年公社制が廃止された頃の郷は、資産の69%が共産党下にあり、個々の郷民は非常に貧しく、中国全土と比較しても最低水準の貧困家庭が102 世帯、人口換算で401 人で、郷民の年収は1982 年まで180 元を超えたことはなかったという。現在全人口は約3 万人で、杏の名産地として知られる。

1978 年に始まった改革開放政策の下で、1980 年代に入ると新疆ウイグル自治区では中央アジアとの交易が活発となり、道路鉄道網や航空路線が整備されていった。だがアクト県はこうした経済発展の恩恵に与れず、半農半牧の最貧困層が絶対的多数であった。『新疆貧困状況及扶貧開発』によると、2000 年の統計でアクト県の貧困家庭は15888 戸、73110 人。同県人口は2003 年で172000 人だから、実に人口の約4 割強が貧困層である。中国社会に於いて最底辺の暮らしぶりであった。

2) 「東トルキスタン・イスラーム党」

事件発生より半年前の1989 年11 月12 日、バレン郷に住む青年ザイディン・ユスブ [Zaidin Yusup] をリーダーに、マドラサ [宗教学校] でイスラームの教えを学んだ若者たち10 人程が、反政府活動を行う目的で「東トルキスタン・イスラーム党」を結成した。主要メンバーは、カグルックのモスクのモッラ [イスラーム宗教学者]、アブドゥルハキム・

1) 『阿克陶県誌』p. 111 によると、1990 年アクト県の総人口は137965 人。内ウイグル人が96296 人、クルグズ人が34585 人である。

2) 『阿克陶県誌』p. 35 によると、事件から3 年後の1993 年、バレン郷の人口は22275 人で、内ウイグル人が21190 人、クルグズ人が888 人、タジク人が181 人、その他の民族が16 人であった。

マフスム [Abdulahkim Maxsum] (1925-1993)³⁾ の下で学んだ学生たちである⁴⁾。

組織結成から会議開催までの僅か4ヶ月で、カシュガルとアクス、トルファンからホタンまでの南新疆一帯で、約700人のウイグル人青年を党に加盟させ、組織は短期間に一気に拡大した。マドラサでイスラーム学を学んだ青年たちの人脈がネットワーク作りに活か

3) トルコ・イスタンブールのウイグル人組織「東トルキスタン・教育と連帯の協会」を設立した主要メンバーのアブリキムハン・マフスムは、「アブドゥルハキム・マフスムに教えを受け、強い影響を受けて、師に近い名に変えた」という。この宗教指導者については中国の出版物に詳しいデータがないので、アブリキムハン・マフスムに、彼の師アブドゥルハキム・マフスムが「常々語っていた」という経歴についてインタビューし、記録を残した。それは以下の通り。「師はグマ県生まれ。1930年年頃、父に連れられアフガニスタン経由でメッカ巡礼に行き、36年帰国。師の父はそれから間もなく盛世才に逮捕され、殺害された。44年三区革命が始まると南新疆でも中国国民党に反対するゲリラ運動が起こり、師もそれに参加して46年から48年までに2度投獄され、48年ムハンマドミン・ボグラが新疆省副主席になった時、特赦となった。その頃最初の私設宗教学校を開設した。54年ホタン・カシュガル地区で反中国共産党暴動が起こると、それに加わった容疑で翌年逮捕投獄された。56年に釈放されると学校を再開。しかし、師の学生が反政府運動に加わるのを当局が問題視し、学校は閉鎖され、師は投獄された。59年から79年まで20年間も獄にいた。80年代改革开放政策によりまた宗教学校をカルグルックに開校できるようになって、数千人の学生を養成した。85年メッカ巡礼のためサウジ、トルコなどを訪問し、在外ウイグル人と親交を結ぶ。バレン郷事件に関わった若者たちが教え子だったことから90年拘束され、93年に死去した。」

4) 『“東突” 分裂主義勢力研究』p.160 には、「(バレン郷事件を起こした) ザイディン・ユスブは、この反動的モッラの八大弟子の一人だった」とある。

(ザイディンの師) アブドゥルハキム・マフスムの教え子で、「ザイディンとは学友だった」と証言するアブドゥルジェリル・エメット [Abduljelil Emet] に、筆者は2006年9月3日ドイツのミュンヘンで会い、口述記録を採った。証言者の略歴とともにバレン郷事件後のこの宗教学校の様子について以下に記す。

—私は1966年ウシュトゥルパン〔烏什県〕生まれ。ドイツに政治亡命し、現在はミュンヘンで工場労働者をしている。イスラーム学を修めた父の希望で、中学卒業後1981年から89年まで、カシュガル地区カルグルックなどのイスラーム宗教学校に学んだ。この学校には、イスラームの高等教育を受けたこと等が原因で22年間投獄されたアブドゥルハキム・マフスム師と、インドとパキスタンに留学してイスラーム学を学び、帰国後の1952年から79年までの27年間「スパイ容疑」で投獄されたマフムット・ウメル [Mehmut Ömer] 師 (マフムット・エセンの敬称でも呼ばれていた) という南新疆で著名なモッラが二人、在籍していた。彼らは人生最後の時期を、青年教育に情熱を注いで過ごし、授業が白熱すると悲惨な獄中体験を語ることもあった。バレン郷事件発生後の1989年12月、カルグルック県政府はこの宗教学校を強制閉鎖し、我々学生は授業再開嘆願のためカルグルック県知事に会いに行ったが埒があかず、自治区政府まで嘆願書を届けようとバス一台を借りてウルムチに向かおうと出発したが、道中イェンギサル県の警察に連行された。翌年1月初頭イェンギサル警察から地元警察に引き渡され、バレン郷事件に連坐していないか、激しい尋問と長きにわたる拘束を受けた。これによって私は欧州亡命を決行した。—

され、金曜礼拝など多くのムスリムが集まる場を利用して蜂起が呼びかけられた⁵⁾。

1990年の年初、バレン郷のジャマル・ムヘメット〔Jamal Muhemmet〕宅で第1回会議を招聘し、蜂起の具体的計画を練った⁶⁾。

同年2月初旬、サイメスジット〔Say mesjit「石ばかりの地のモスク」の意〕で開いた第2回会議では、「急激な人員拡大で、政府筋が何かを勘づいたようだ」と判断し、当初の蜂起予定より時期を早めて4月21日に決行することを確認した。

同年3月15日に郷民のムフタル・ホシュル〔Muhtar Hoshur〕宅で開いた第3回会議では、武器や爆発物の準備、馬やナイフや運動靴など備品の購入、組織規則を決め、秘密を厳守しなかった者への罰則を論議した。

同年3月25日、サイメスジットで再度開いた第4回会議では、各人に武装闘争展開時に於ける具体的任務を割り振り、ザイディン・ユスブは「私が死んだ場合、アブドゥゲニ・トゥルスン〔Abdugheni Tursun〕が指導する」と後継者を指名した。

同年3月20～23日、カグルックでザイディンらが軍事教練を行ない、イスハク・ウシュル〔Ishaq Uxur〕宅では40人あまりが武器使用講習を受けた。メンバーは3月21日～31日の11日間、バレン郷にある4つの集落から麻袋15個分の食糧と13000元を集め、爆発物や手榴弾、馬4頭、バイク1台を購入し、準備を進めた。

イスラーム宗教指導者で「暴動を起こした東トルキスタン・イスラーム党に自らの教え

5) 『Barin Inqilawining 15 yili [バレン革命の15周年]』(2005年刊), Nizamudin Yuseyin [ニザミディン・ヒュセイン]「Barin Weqesi [バレン郷事件]」pp.69-86の記述による。この書籍はISBN〔国際標準図書番号〕を割り振られた正規の出版物ではなく、トルコ・イスタンブール在住のウイグル人編集者アブドゥジェリル・トゥラン〔Abdujêlil Turan〕が編集し、彼が経営するタクラマカンウイグル出版社〔Teklimakan Uyghur Neshriyati〕の名義で、WUC〔世界ウイグル会議〕の依頼で「私家版」として出版した体裁をとっている。アブドゥジェリル・トゥラン編集でタクラマカンウイグル出版社の名義で刊行する書籍のほとんどが、トルコや欧州や中東に住むウイグル人を読者としており、寄付で刊行費用を賄い、希望者に配布する形で流通しているので、当地のウイグル人コミュニティの外にある者には極めて入手しづらい。この本でバレン郷事件の経緯を記した部分は、新疆維吾爾自治区地方誌編纂委員会が編集した『新疆通誌 20 公安誌』新疆人民出版社(2004年)の中に収録されている「宋漢良書記在自治区黨員幹部大會上的講話摘要(宋漢良新疆ウイグル自治区黨書記が1990年4月21日に自治区共產黨員幹部大會の席上で述べた講話の要旨)」と事実経緯についてはほぼ相違ないが、ウイグル人関係者への取材から知り得た内容については、独自の情報が含まれている。

6) 事件当日に至るまでの経緯や、事件に関わった主要人物、事件発生後の経緯の詳細は、先述の「Barin Weqesi [バレン郷事件]」、及び『新疆反对民族分裂主義闘争史話』pp.129-151に依拠した。『新疆反对民族分裂主義闘争史話』は中国共产党新疆ウイグル自治区委員会党史研究室が編纂し、新疆人民出版社から1999年に5000部、公に刊行されたもので、中国共产党の公式見解であると言っても過言では無かろう。1930年代から出版前年までの間に新疆で発生した反政府運動が時系列を追ってかなり詳細に述べられているが、その中でもバレン郷事件に言及する部分は他の事件に比べて圧倒的に多く、20頁以上の紙幅が割かれている。

子もいた」というアブドゥレヒム・アブドゥラシット [Abdurehim Abdureshit]⁷⁾ は、次

7) アブドゥレヒム・アブドゥラシットはドイツ・ミュンヘン在住の亡命ウイグル人。1963年新疆クチャ生まれ。クチャやカルグルックのマドラサで学び、クチャのマドラサでイスラーム宗教学を教えていたが、バレン郷事件への関与を当局から疑われ、中央アジアを経て1997年3月にドイツへ政治亡命した。筆者は2006年9月3日にミュンヘンで会い、口述を記録した。聞き取りの際の使用言語は漢語とウイグル語。彼の口述は家族史や亡命経緯など広範に渡ったが、バレン郷事件関連部分のみを資料として以下に添付する。

ー私は1963年6月4日クチャ生まれ。高校卒業後、83年から87年までクチャとカルグルックのマドラサで学び、その後の88年から90年まで、クチャのモスクやマドラサで教員として、若者にイスラームの教えを説いた。1990年4月5日朝に発生した反政府蜂起「バレン郷事件」では、共にマドラサで学んだ友人や教え子が蜂起に参加したので、私は公安から首謀者の1人ではないかと疑われ、同年7月25日クチャで拘束後、クチャ県公安局第一号監獄に投獄された。地元公安のみならず、アクス地区やカシュガル地区やウルムチからも検察関係者などがやってきて、何度も入念な取り調べを受けたが逮捕者から私の関与を供述する者は現れず、検察は有罪にする手がかりがなかったため91年8月15日に釈放された。

私は、事件にも組織にも直接関与せず、武装蜂起を呼びかけもしなかったけれど、メンバーが何をしようとしていたのかはおおよそ知っていた。友人や教え子から「指導者の一人に」と請われ、断ったものの、彼らとの交流はずっと続いたからだ。この蜂起は時間をかけて計画を練って行われたものではなかった。新疆で発生する暴動の多くがそうだが、4～5人で反政府組織を立ち上げてメンバーを広げようとしても、本格的活動にかかる前に、大概、組織の存在が公安に露呈する。それは国家安全庁が密告を奨励し、個人を監視する制度を作り上げているからで、例えば新疆の農村ではよその村から誰かがやって来て、ある家に滞在しようものなら、すぐに身元について村民委員会の調べが入る。だから周到に準備した後に反政府暴動を遂行するのは不可能に近い。

事件を起こした「東トルキスタン・イスラーム党」は、89年11月12日に結成された。地元バレンの出身者は、リーダーのザイディン・ユスブとジャマル・ムハンメットの二人。組織設立時は、彼らをはじめ10人あまりの小グループだった。メンバーのうちトルファン出身のカミリディン・ツラピル、クチャ出身のアブドゥル・ヘミットはいずれも私の学生で、当時まだ20歳前後だった。組織の中核にはこのような若者が多く、人生経験も乏しく、知識や学問的水準も決して高いとは言えなかった。ただ理想は高く「下部組織を各地に設け、祖国の解放と独立のため活発な運動をする」と方針を立てていた。

私は彼らに、「イスラーム党という名称はやめた方がよい。長い間、ウイグル人は共産主義体制下で生きてきたから、イスラームに関心の薄い人も増えている。組織は新疆の独立を謳っているが、アフガニスタンのようなイスラーム法による統治をめざしていると人々に誤解されたら、広範な支持は得られない」と進言した。それに対してメンバーは、「イスラーム国家を作るのが目標ではない。運動に命がけで参加している人たちはイスラームの教えを学んだ者がほとんどだし、ウイグル人はイスラームの知識が少なくても自分がムスリムだとその自覚はある。イスラームを全面に出して動けば、勇気ある人々からの支持が集まる」と反論を述べた。

当時の私は、香港が英国から中国に返還される97年には、体制は大きく変わるだろうと淡い期待を抱いていた。外国から入ってきたアラビア語新聞にも、そのような論説が掲載されていたから、西欧がソ連を崩壊させたように中国もそうなると信じていた。だから「今は武装蜂起の時期ではない、機会を窺って中国の体制が外国からの圧力で崩壊の危機にさらされた時に、決起すればよい」

のように証言する。「この蜂起は時間をかけて計画を練って行われたものではなかった。

と若者に説いた。しかし、彼らは私とは異なる考えを持っていた。

ザイディンは、最初の計画ではバレン郷で武装闘争を執行するつもりはなく、「カシュガルに入って市政府を征圧し、東トルキスタン国旗を掲げ、武装抵抗を2時間ほど行なったら、アフガニスタンから援護部隊がくる」と主張した。ザイディンは自信ありげだったが、アフガニスタン紛争は89年に終結し、ソ連軍が撤退して復興を急いでいた当時、到底アフガンからムジャヒディンの援軍がくるなど、私には信じられなかった。私たちはみな知っていた。手中の武器がいかにか時代遅れで数が限られているか、ウイグル人の力がいかにか弱いかを。中国の新鋭装備の軍に勝てるとは思ってなかった。ザイディンはこんなことも言った。「この革命に失敗してメンバーが全員死んだとしても、大勢が血を流すのは無駄ではない。そうでもしないと国際社会は私たちを忘れてしまう」。むしろ彼の本音はこちらだったのだろう。

彼らは「東トルキスタン・イスラーム党」を結成するとすぐに動き出し、数百発の爆発物を自ら製造し、農村家庭にあった猟銃74丁を集め、200から300のナイフや斧を用意した。90年2月まで活動を拡大させ、トルファンからホタンまでの各地、アクス、カシュガルで700人位を組織に加盟させた。2月に一度幹部会議を開いた時、「加盟者が各地で増える一方で機密保持は大変になり、どうやら政府筋も我々に感づいているようだ。だから元の予定より前倒しで、4月21日には武装蜂起を執行する」と決定した。

実際には4月5日、武力対立が始まった。それは計画が彼らの想像以上に早く露呈したからだ。武装闘争に使用する馬を購入した時、バザールでメンバーの1人が値切り交渉時にミスを犯し、「この馬は祖国解放のための聖戦で使うのだから、安くしてくれてもおまえに損はない」と口走ったのがきっかけとも言われている。

4月5日、政府軍は全ての準備を整えてからバレン郷を包囲し、郷に向けて「我々は計画を把握している、ザイディン、おとなしく武器を引き渡せ」と拡声器で呼びかけた。バレン郷にいたメンバー200人あまりが、武器を手に戦に出た。激しい戦闘がバレン郷の各村と周辺の山で展開され、ザイディンら幹部が命を落とし、或いは逮捕され、山中で最後まで抵抗を続けていた者たちも、4月末までには全滅した。

政府側メディアは、軍の兵士5人も戦闘で死亡したと報じた。だが、バレン郷民の証言は少々違う。武器を持った組織メンバーが村の近くの森に逃げ、軍が包囲して銃を乱射し続けた時、見通しの悪い森の中で解放軍兵士が互いに撃ち合い、かなりの死者を出したという。事件から間もなく、ゲリラ戦を行えないよう森の樹木を伐採したと聞いた。

私が事件への関与を疑われて投獄された際には、自治区警察庁の副庁長で「バレン郷事件」調査チームの責任者だったメメットイミン・ローズィ（当時）から取り調べを受けた。副庁長は事件の中心的人物が若年者ばかりであることを不審に思い、私の自白を得ようと電気棒や棍棒で気を失うまで殴った。収監された時に身長174cmで76kgあった身体が、13ヶ月後に出所したときは171cmで40kgまでに減っていた。私は治療を受けるため一旦外に出ることを許可され、父に身柄を引き渡された。

私の学生だったカミリディン・ツラピルは事件後に逮捕され、18年の実刑判決が下り、今もウルムチ八家戸監獄にいる。先述したように当初ザイディンはバレン郷ではなくカシュガルで武装闘争を執行する計画で、カミリディンが石油輸送列車をカシュガルで破壊する担当だった。結果としてそれは行われなかったものの、裁判ではこの罪も問われた。

同級生だったヘセンジャン・イブラヒムは、バレン郷事件への関与を疑われウルムチで逮捕され、

新疆では反政府組織を立ち上げて、本格的な活動にかかる前に大概、組織の存在が公安に露呈する。それは国家安全庁が密告を奨励し、個人を監視する制度を作り上げているからだ。一方、ウイグル人ジャーナリストで事件取材したニザミディン・ヒュセイイン[Nizamdin Yuseyin]⁸⁾は著作で、「当局は短時間に周到な準備と訓練をしていたことに震撼し、それが人民解放軍と兵団による大掃討戦に繋がった」との見解を述べている。

3) バレン郷事件を起こした中心メンバーたち

反政府組織の主要メンバーは以下の通り。

- ①ザイディン・ユスブ：組織リーダーで蜂起時の最高司令官。26歳。バレン郷出身の農民。カシュガルのマドラサで学んだ後、ウルムチ、アクス、カシュガルのカグルック、ホタンなどのマドラサを転々とする。1989年以降バレン郷で「東トルキスタン・イスラーム党」の組織化に着手。メンバーを集め、武器を準備。蜂起の最中に射殺された。
- ②アブドゥゲニ・トゥルスン：副司令官かつ財務担当。いまだ捕まっていない。
- ③ジャマル・ムヘメット：28歳。バレン郷出身の農民。グループのNo. 3。1989年12月15日組織に参加。計画立案と軍事訓練を担当し、積極的に資金集めをした。1989年8月末頃オイタグ・セメント工場から爆発物を購入。1990年2月、カシュガルにある個人経営の製鉄職人の店で200個の手榴弾の製造を依頼し、バレン郷に持ち帰った。他の仲間と共に彼自身も100個の手榴弾を製造。戦闘中に逮捕された。
- ④イスハク・ウシュル：後方支援担当。逃亡中に公安に見つけられ射殺された際、現金4000元を所持。
- ⑤アブドゥレヒム・トゥルディ [Abdurehim Turdi]：情報伝達と手製手榴弾製造を担当。逮捕。
- ⑥ムヘメット・トゥルディ [Muhemmet Turdi]：交通手段調査や馬の調達などを担当。当局に射殺された。
- ⑦エヘット・ティリワルディ [Ehet Tiliwaldi]：蜂起部隊第一支隊司令官。解放軍兵士から武器を奪って応戦し、戦闘中に逮捕された。

取調中に殴られて92年11月内臓破裂で死んだ。マドラサの同級生イディリスハン・ウメルも、バレン郷事件をはじめ複数の事件に係わった犯人として銃殺された。私は再拘束を恐れて各地を逃げ回り、96年6月12日ついにカザフに出国し、祖国も家族も捨て欧州へ亡命した。ー

8) ウイグル人ジャーナリスト、ニザミディン・ヒュセイインの略歴は以下の通り。原名はトフティ・メメット [Toxti Memet]。1928年カシュガル地区カルグルック生まれ。47年新疆学院歴史地理学科に入学、50年卒業し、新疆日報社の記者となる。58年から78年まで右派、民族主義者の罪状で労働改造所に送られる。78年より新疆日報に復職。88年退職。それからはフリーのジャーナリストとして、バレン郷事件をはじめ様々な事件取材。97年3月公安当局に「イリ事件の指導者」容疑で逮捕され、ウルムチ第三監獄に投獄された。98年4月5日保釈。98年5月6日死去。本稿で典拠として使用している彼のレポート「Barin Weqesi [バレン郷事件]」には「1990年10月カシュガルで執筆」との但し書きがある。

⑧トゥルグン・イスハク [Turghun Ishaq] : 蜂起部隊第二支隊司令官。抵抗時に逮捕された。

⑨ムヘメット・トゥルスン [Muhemmet Tursun] : 23 歳。この人物は「以前に政府から政治的弾圧を受けた経験がある」とウイグル人ジャーナリストのニザミディンは記しているが詳細不明。宣伝ビラを複数回に渡って配布。戦闘中、武警から機関銃 1 丁と拳銃 1 丁、公安の制服を 1 セット奪って逃走。解放軍兵士と激しい銃撃戦となり抵抗するが、射殺された。

⑩スィディクハジ・イスハク [Sidiq-haji Ishaq] : 26 歳。バレン郷出身。1990 年 3 月 26 日組織に参加。武警の機関銃 1 丁を奪い、郷役場に手榴弾 3 個を投げ入れた。4 月 6 日自宅で逮捕された際、機関銃 1 丁、手榴弾 1 個を所持していた。

⑪アブドゥッラ・カスィム [Abdulla Qasim] : 30 歳。バレン郷出身で、1990 年 1 月 14 日組織に参加。役割は周囲の見張り。公安から拳銃 1 丁を奪った。4 月 6 日拳銃を握ったまま逮捕された。

II バレン郷事件の経緯

中国共産党の現地当局は 1990 年 3 月、「東トルキスタン・イスラーム党」の動きを察知し、偵察に動き出した。ちょうどイスラームの断食月、ラマザーンの時期であった。

3 月 20 日バレン郷党委員会が、アクト県党委員会副書記トゥルスン・アブドゥレヒム [Tursun Abdurehim] に「最近、イスラーム宗教人士の動きが不穏である」旨を報告、トゥルスンはそれを即、自治州党委員会書記牛秉信に告げた。クズルス・クルグズ自治州の漢人党委員会書記牛秉信とアクト県党委員会書記吳乃義、県公安局長の党万林らは 3 月 22 日、2 人の公安警察をバレン郷に送り込んで内偵させ、密偵者は 24 ～ 28 日、県党委員会に報告書を提出した。29 日アクト県公安局のヤセン・カスィム [Yasen Qasim] 副部長も自らバレン郷に赴いて再調査し、尋常ならざる状況であると察知した。4 月 2 日に再度ヤセン・カスィムはバレン郷に赴き、調査を行っている。

蜂起の具体的計画は 4 月 4 日、住民の中の監視役から郷民委員会、さらに地元政府に露呈し、情報を聞き知ったトゥルスン・アブドゥレヒムが郷に出向き、郷民対策会議を招集して組織に「暴動決行阻止」を迫るとともに、自治州党委員会など上層部に事態を報告した。しかし、会議参加者には「東トルキスタン・イスラーム党」のメンバーもいて、その一人エイサ・モッラ [Eysa Molla] は「すでにそれなりの準備をしている」と決行を宣言したとされる。

県党委副書記の来郷を受けて、メンバーは動き出した。組織の 30 人が集団で郷の派出所幹部アリム・イブラヒム [Arim Ibrahim] 宅に赴き、郷警官は鎮圧に動かぬよう説得。さらに夜には別のメンバー 30 人が、チレクヤ村の保安部長エイサ・ロズィ [Eysa Rozi] の説得に行った。これら一連の行為から、メンバーが本気であると知ったトゥルスン副書記及びヤセン・カスィム県公安局副部長は、緊急事態と判断しチレクヤ村に直行し、モス

クに集まっていた約 200 人に中国共産党の政策を説明したが、効果は無かった。

4 月 5 日早朝 6 時、組織メンバー 200 数人が「アッラーアクバル〔神は偉大なり〕」を叫びながら、懐中電灯を持って郷役場まで行進し、役場入口でファジュル〔黎明〕の礼拝を行った後、郷政府への要求を読み上げた。

アクト県党委員会トゥルスン副書記は「事態は緊迫している」と牛秉信に電話で連絡し、武警の鎮圧を要求するとともに「当面、漢人幹部は来ないように」と提言した。

4 月 5 日午前、自治州と県は幹部 60 人を派遣した。

同日午後 6 時 30 分、自治州から派遣された武装兵士 62 人は到着すると即座にバレン郷を包囲し、各村に潜む「東トルキスタン・イスラーム党」のメンバーに、政府側幹部たちが拡声器で「わたしたちは計画を把握している。ザイディン,おとなしく武器を引き渡せ」と呼びかけた。

同日夜 9 時にカシュガル市から 130 人の武装兵士が到着すると、まもなく東トルキスタン・イスラーム党と政府軍の間で戦闘が始まった。蜂起メンバーは政府軍兵士の乗ったバスのガラス窓を破壊し、軍人 14 人を殴って怪我をさせ、政府側も 19 人の蜂起メンバーを拘束した。

同日夜 9 時 30 分には自治州や県から更に 200 人の武装兵士が到着。政府軍の数は 500 人を超えた。この頃ザイディン・ユスブの逮捕を命ぜられていた公安警察 5 人が反政府組織に捕まり、所持していた拳銃 5 丁・無線と電気棒と手錠各 1 個・5 人分の制服を奪われた。

同日夜 11 時、県からやってきた武警边防大隊の車両が襲撃され、乗車していた 4 人の漢人幹部・許新建（アクト県武警边防大隊の副指導員）⁹⁾、王景平（アクト県ガイゼ村边防派出所司務長）、蘆建輝（アクト県边防大隊会計担当）、郭学文（アクト県边防大隊会計担当）が殺害され、拳銃 4 丁が奪われた。その直後カシュガル武警支隊第 6 中隊のアリ・ヤスィン（Ali Yasin）隊長、呉勇班長、田崇峰副班長、運転手アディルらが車で移動中、蜂起メンバーに捉えられ、機関銃 3 丁と拳銃 1 丁、短銃 5 丁、銃弾 400 発が奪われ、班長と副班長が殺害され、車は手榴弾で爆破された。

4 月 6 日 0 時、郷役場を占拠した蜂起メンバーは、捕虜の交換を要求。しかし、政府側は応じなかった。3 時 59 分、蜂起メンバーは自治州や県の民族幹部に話し合いを提案したが、人質に取られることを恐れ、政府側からは再度拒否された。

同日 4 時 36 分、4000 人を超える特別武装部隊が投入され、一斉攻撃が始まった。ザイディン・ユスブはこの戦闘で死亡。それでも抵抗は続き、戦闘は更に激しくなった。

同日 5 時頃、南疆軍区の解放軍兵士や 兵団から選ばれた先鋭、カシュガル地区やクル

9) 『阿克陶県誌』pp. 606-609 によると、許新建は 1955 年四川省生まれ、1 歳で新疆に移住、ウイグル語が話せた。王景平は 1963 年新疆生産建設兵団 110 団場生まれ、蘆建輝は 1963 年新疆生産建設兵団農 2 師 27 団場生まれ、郭学文は 1965 年新疆バイ県生まれ。この中では許がリーダー格で、共に死んだ 3 人を護衛に付けてバレン郷に向かったが、現地から約 1.5 km の紅橋という場所で、待ち伏せをしていた「東トルキスタン・イスラーム党」に襲撃され死亡した。4 人は中国人民武装警察部隊政治部から「革命烈士」の号を授けられ、カシュガル革命烈士陵園に葬られた。

グズ自治州の警察部隊など、あわせて1万5千人以上の部隊、さらに人民解放軍空軍や砲兵隊を併せて3千人が一斉にバレンへの進攻を始めたという。なおここで記す政府側が投入した「治安部隊」の人員は、ウイグル人ジャーナリスト・ニザミディンが記したレポートに依拠する数であり、中国で刊行された諸史料には死者の数値には言及があるものの、動員された政府側兵士数について具体的に触れているものはない。

同日6時30分、武装部隊大隊の副隊長エジズ・エイト〔Eziz Heyt〕らウイグル人が、自治州第6中隊の一部兵士らを連れ、政府側に参加。戦闘は激化し、政府側が徐々に役場の蜂起グループ側に近づいていった。この戦いでカシュガル武装部隊第2支隊の副隊長ハシム〔Hashim〕の足が撃たれ、もう一人の兵士が怪我をした。

同日9時に指導部が全兵に「全面攻撃開始」命令を発令。全県内には非常事態と戒厳令を発令、郷に通じる全ての道が封鎖された。そして一般市民に対しては「一切、現在地から動かないこと」が命じられた。そしてバレン郷全体の住宅一軒一軒が、軍の包囲管理下に置かれた。

激しい武装鎮圧と抵抗戦で、6日に組織メンバー6人、一般民衆42人が死亡。100人以上の市民が重傷、93人が軽傷、メンバーの一部が逃走した。容疑者や協力者の拘束と、逮捕時の殴打暴力、家宅捜査などがピークを迎えた。この日の午前中には逃亡した約30人の蜂起メンバーが逮捕された。

戦闘は4月8日まで、バレン郷の各村の中や周辺の山で、激しい戦闘が3日間続いた。

4月9日、敗走して山深く逃げた蜂起メンバーに、投降を呼びかけ続けていた退役軍人のウイグル人アディル・イミン〔Adil Imin〕¹⁰⁾が銃撃されて死亡している。

4月10日朝3時半まで非常事態が続く、更に蜂起グループの59人が戦闘で死亡、7人が重傷を負って拘束された。掃討戦に驚いて郷を脱出しようとした市民200人以上も拘束された。暴動鎮圧後、公安は一般市民も含めて捜査から漏れていた人物の洗い出しを行なった。

馬大正¹¹⁾・許建英著『“東突厥斯坦国” 迷夢的幻滅〔“東トルキスタン国” 妄想の消滅〕』（新疆人民出版社 2006年 p.182）には、バレン郷事件の顛末について次のように記している。「(バレン郷事件では) 合計16人の暴徒が銃撃で死亡し、508人が拘留された」「最終

10) 『阿克陶県誌』pp.606-609によると、アディル・イミンは1960年新疆阿克ト県生まれのウイグル人。ウルムチ市第9中学（漢族学校・日本の中学高校に相当）に学んだ後に故郷へ帰り、兵役を終えてからは阿克ト県人民政府弁公室などで通訳や翻訳の仕事をしていた。死亡後、新疆ウイグル自治区人民政府から「革命烈士」の号を授けられた。

11) 中国社会科学院边疆地史研究センター副主任の馬大正は、清朝研究の大家であるが、近年は国家プロジェクトの指導者として新疆に於ける反政府運動の研究を大々的に遂行しており、『国家利益高于一切～新疆穩定問題的觀察与思考〔国家利益は何より優先される～新疆治安維持問題についての觀察と思考〕』（新疆人民出版社、2002年）などの著書もある。馬大正は外国人研究者にはアクセスできない諸史料を手にするのできる地位と立場にあるが、極めて残念なことに、新疆で発生したウイグル人による反政府運動に関する著作については、一切典拠が書かれていない。

的に（略）暴徒 124 人を逮捕し、40 名に判決を下し、その内の 3 人を死刑とし、378 人を教育ののち保釈、或いは保証人を立て審問待機とした」¹²⁾。

Ⅲ 「東トルキスタン・イスラーム党」の要求と、中国政府の事件に対する見解

1) 蜂起側が主張する蜂起原因

バレン郷事件について、郷民や兵士から聴き取り取材をしたウイグル人ジャーナリストのニザミディン・ヒュセインは、蜂起組織「東トルキスタン・イスラーム党」が 4 月 5 日早朝、郷政府の門前で読み上げた要求内容について次のように伝えている。

「我々の郷では、1989 年の 1 年間に（のべ）250 人の女性が強制中絶させられた。これは殺人に他ならない」「ウルムチには中国各地から 15 分ごとに列車が到着する。下りてくるのは漢人だ。その一方で政府は我々に、厳しい産児制限を実施している。人口増加を阻止するには計画生育をやめて、漢人の新疆移住をやめさせればよいではないか。私達は戦いを起こして漢人たちを新疆から追い出す」「庶民の肩にのし掛かる税や労役を軽くせよ。大漢族主義をなくせ。民主主義を実施せよ。（ウイグル人への）弾圧や侮辱に反対する」。

ニザミディンのレポートでは、改革開放による急激な漢人の新疆移住と、党の政策としての計画生育～強制堕胎や出産管理～が、バレン郷事件が起こった要因だとザイディンの演説での主張を強調している。事件から約 2 週間後の 4 月 21 日に宋漢良新疆ウイグル自治区党書記が自治区党委員会の幹部大会で述べた講話の中にも、ザイディンのこれと同様の主張は見受けられる（「宋漢良書記在自治区党员幹部大会上的讲话摘要」、『新疆通誌公安誌』に収録）。だが、こちらはあくまでそれは「一因」であるとの見解である。

たしかに 1979 年に始まった計画生育政策（所謂「一人っ子政策」）が当時、漢人による新疆入植と共に、ウイグル人に民族存亡の危機感を与えたのは想像に難くない。計画生育政策は 80 年代に段階的に整備され、新疆では 1988 年 4 月「新疆ウイグル自治区少数民族計画出産暫定規定」の公布によって、ウイグル人は農村 3 人、都市 2 人までの産児制限と違反者への罰金が徹底された。

『阿克陶県誌』p. 121-123 には 1986 年から 1993 年の間、阿克ト県で計画生育政策によって「節育（子を産まないようにすること）」の処置を受けた女性の数の推移が、漢人と「少数民族」（この場合は新疆の主体民族であるウイグル人ら「中国の少数民族」）の別で、図表化されている。それによると、1989 年からバレン郷事件が起きた 1990 年の 1 年間で、阿克ト県では大規模な「節育」措置が「少数民族」女性に行われていたことが分かる。1986 年から 88 年に「節育」措置をとられた「少数民族」女性はいずれも各年約 4000 人だが、1989 年には 6700 人と上昇し、1990 年には 11000 人と急上昇している。さらに、妊娠できないように不妊手術を施された「少数民族」女性は 1986 年から 88 年の間は 130 人

12) 『新疆反分裂闘争和穩定工作的实践与思考』p. 7 にも、死刑者数や逮捕者数について同様の記述がある。ただし、同著では「現場で銃撃戦で命を落とした反乱分子は計 17 名」となっている。

ほどであるが、1990 年には 230 人とほぼ倍増。避妊リングを装着された「少数民族」女性数は、1986 年から 88 年の間は各年 700 人ほどであるが、1990 年には 2000 人とほぼ 3 倍増となっている。

計画生育反対を旗印に決行された暴動は、バレン郷事件前後の時期の新疆では、頻発している。一例を挙げると、2001 年 2 月 20 日、カシュガル市パフタクリ郷の計画生育弁公室に勤務するウイグル人女性が襲われて重傷を負った¹³⁾。ゆえに計画生育政策への不満がバレン郷の暴動の一つの要因となったとすれば、それは合理性がある。しかし、〔注 7〕に記したように、この地方のモスクのモッラであったアブドゥレヒム・アブドゥラシットの証言によると、東トルキスタン・イスラーム党は「新疆の独立を謳って」たわけであるから、蜂起に至る原因はそれだけとは到底考えられない。

2) 中国官製メディアが伝える「暴動」とその原因

では、中国官製メディアはバレン郷事件を如何に伝え、原因をどう分析したのか。

事件から 2 週間以上経った 1990 年 4 月 22 日、NHK ニュースは「イギリス BBC 放送が傍受した新疆ウイグル自治区のテレビ放送」の内容¹⁴⁾を根拠に、「中国当局は今日、バレン郷事件の発生を、初めて公式に認め」たと伝えた¹⁵⁾。その翌日(4 月 23 日)読売新聞朝刊も、BBC の傍受した新疆電視台の内容を次のように伝えている。「今月 5 日、『逃走中の殺人犯、労働キャンプの出所者、常習窃盗犯』などをリーダーとする集団が、『祭り』(ラマザンのこと)を利用して『中国共産党の打倒をはかって、無知な大衆を扇動』して騒乱を起こした¹⁶⁾。この第一報では、「東トルキスタン・イスラーム党」は『逃走中の殺人犯、労働キャ

13) 2001 年 2 月 21 日新華社電、同年 3 月 3 日『香港星島日報』報道、ドイツの東トルキスタン情報センター HP ニュースなどによる。この報道では事件と同日、カシュガル地区ケシケル・コナ・シェヘル(疏附)県トックザック鎮で、裁判官メメットジャンが 40 箇所も刺されて殺害された旨も記している。この 2 人は夫婦で、メメットジャンはバレン郷事件発生後、26 人のウイグル人に死刑判決を下した人物の 1 人であり、バレン郷事件に連坐して投獄されて出所した者たちが、怨嗟からこの事件を起こしたという。

14) この時点では、「バレンという町で今月 5 日から 6 日にかけて起き、治安部隊との衝突で 15 人の住民を含む 22 人が死亡し 13 人が怪我をし」「一説にはこの事件の犠牲者は 50 人以上」と新疆テレビは報道したという。また事件の発生原因をこの時の BBC は「当局がイスラーム教のモスク建設を禁止したのが発端」と伝えている。しかし、先述したアブドゥレヒム・アブドゥラシットは、「取材を受けた外国メディアの記者達は、ほぼ皆、バレン郷事件の原因を『モスク建設に反対されたムスリムが蜂起した』と認識していたが、その事実はない。私は長い間モスクでイスラーム学を教えていたから、そうであれば必ず耳にしたはずで、それは誤報である」と断じた。

15) NHK が放送する前日の 1990 年 4 月 21 日に宋漢良が自治区黨員幹部大会でバレン郷事件についての講話を行っており、それを受けて新疆テレビが公開し、さらに国外メディアが後追い放送したと考えられる。

16) このニュースは、バレン郷事件が発生すると「警察隊が現場に急行したが、逆に包囲、攻撃され、6 人が殺され、武器を奪われた。当局側は翌 6 日、治安部隊を投入、この平定作戦でなお抵

ンプの出所者、常習窃盗犯』などをリーダーとする集団」¹⁷⁾と報じていたが、具体的に誰が逃走中の殺人者や常習窃盗犯かを明言しておらず、その後のバレン郷事件に言及した出版物には、管見の限りこの内容は記されていない。

『新疆日報』は4月23日付で「暴動の“真相”を伝える特集」と題した記事を掲載し、「『東トルキスタン・イスラーム党』が公然と活動をはじめ」、「ごく少数の者が『反革命武装暴乱』を起こしたが、鎮圧された」と伝え、イスラーム系の少数民族には「今回の“ほう起”をコーランに基づく『聖戦』と認識する者もいて、「中国からの分離を求める反体制組織の動き」があると主張した。さらに事件首謀者達は「東トルキスタン共和国」の再興を目標としていたことも報じられた。

事件から3年後に新疆ウイグル自治区共産党党史研究室が編纂し刊行した『新疆反对民族分裂主義闘争史話』では、バレン郷事件を「反動分子が宗教を利用し」「祖国分裂を企てた反革命武装暴動」だと定義づけている。

新疆のウイグル人に拘わらず、中国で反政府組織が抗議行動に至る際には生活に根ざした切実な不満が背景にあって、それが実際の行動に繋がっていくのが通例であるが、官制報道では反政府組織の主張や彼らが蜂起を決断した背景はあまり明らかにされず、抗議行動を起こした側の凶悪性や不法性が殊更に強調される傾向がある。とはいえ官制報道も決して虚偽ばかりではなく、そこから中国が抱える様々な社会問題が垣間見えてくる。

リーダーであったザイディン・ユスブが記した小冊子『ジハード法規』には、「ジハードの目的は、異教徒を殲滅することだ。異教徒に対して進撃を始めよう」との文言が記されてあったとされる¹⁸⁾。「東トルキスタン・イスラーム党」は、このようにイスラームを粘着力として、漢人を中心とする社会に不満を抱える南新疆各地のウイグル人若年層を急速に取り込み、蜂起で落命することへの恐怖を、信仰心で抑えることで武力破壊を伴う活動を展開したことは疑いない。しかし、当局が東トルキスタン・イスラーム党を「中国からの分離を求める反体制組織」と断じている点については、彼らがどこまで本気で計画的に独立実現を考えていたのかは更なる検証が必要であろう。

抗を続ける『少数の悪党』15人を殺害した」「当局側の死者は2日間で計7人」とも伝えている。

17) 主要メンバーのうち労働改造所の経験者はムハンメット・トゥルスン。

18) 『ジハード法規』については『新疆反对民族分裂主義闘争史話』p.130に触れている。なおバレン郷事件の発生当時、アクト県中国共産党県委員会書記は河南省原籍の漢人呉乃義で、副書記が河北省原籍の漢人劉乃章。党常務委員は山東、広東、天津原籍の漢人の3人、およびアクト県原籍のウイグル人2人であった。政治の中枢の地位に就いていたのは、この地の人口比からすると極めて少数派であった漢人が中心だ。当時のアクト県の人口は137965人で、ウイグル人は約70%の96296人、クルグズ人が約25%の34585人、残り5%が漢人を含むその他であった。

Ⅳ バレン郷事件以降の「東トルキスタン・イスラーム党」の動向 ～「東トルキスタン・イスラーム改革党」への再編とその反政府活動

バレン郷事件で拘束されなかった「東トルキスタン・イスラーム党」の構成員は、事件発生後の1990年8月、ウルムチでクチャ出身のケレム・アブドゥウェリ〔Kerem Abduweli〕の下に結集し、バレン郷事件を鎮圧した中国共産党政権への報復を誓って新たに「東トルキスタン・イスラーム改革党」（「東トルキスタン・イスラーム改革者党」とも）を立ち上げた¹⁹⁾。この組織はバレン郷以外に居住するメンバーで構成された。「東トルキスタン・イスラーム改革党」はその後、約3年間に渡って暴力的破壊行為を伴う反政府活動を新疆各地で展開し、多くの逮捕者を出した。この組織は特定の政府関連施設や官僚を標的にするに留まらず、時限爆弾によって一般市民の無差別殺傷を行うなど暴力的破壊攻撃を伴う反社会的行動をエスカレートさせていった。以下、時系列を追って彼らが起こした暴力事件について述べる。

1990年10月「東トルキスタン・イスラーム党」は²⁰⁾、オブルカシム・イブラヒム〔Obulqasim Ibrahim〕²¹⁾らが製造した時限爆弾を、メメット・ユヌス〔Memet Yunus〕がクチャの売店に設置して爆破を試みたが、公安に事前発覚して未遂に終わった。この事件に関与した者の一部は11月13日に逮捕され、公開裁判が行われた。

1991年2月28日クチャの交通旅館に仕掛けられた時限爆弾が爆発し、1人が爆死、13人が負傷し²²⁾、その後に「東トルキスタン・イスラーム党」が犯行声明を公開した。

1991年7月「東トルキスタン・イスラーム改革党」は²³⁾、カグルック出身パキスタン国

19) 『“東突厥斯坦国”迷夢的幻滅』p.155には、「キレム・アブドゥウェリは小学校卒業後、帽子職人を生業としていた。彼は事件当時居たカルグルックからウルムチに逃げ、組織を立ち上げた」とある。

20) 『“東突厥斯坦国”迷夢的幻滅』p.155には、組織はこの頃「南新疆のシャヤルやカルグルック等の地で党員を拡大させ、機材や弾薬を購入し、爆破コントロール装置を開発していた」とある。

21) 「東トルキスタン・イスラーム改革党」の財務担当だったクチャ出身のオブルカシム・イブラヒムについて、添付口述資料証言者のアブドゥレヒム・アブドゥラシットは以下のように回想している。―彼は92年7月24日に逮捕、94年3月17日に銃殺され、4月7日家族に遺体が返された。葬儀はウルムチ六道湾モスクで執り行われ、私はそれに参列した。亡骸を洗い清め、白い布で覆うイスラームの葬儀を執り行う時、遺体に2カ所の銃創を見た。1つは心臓、もう1つは気道を貫いていた。それより目を覆ったのは手の拷問傷である。指先には針で刺された無数の痕が生々しく、指はペンチでねじ曲げられたのか骨が全て砕かれた状態だった。こうした実行犯に対する当局の扱いが、よけいに報復の応酬を招いている―。

22) 『“東突”分裂主義勢力研究』p.162によると、この事件直前の「1990年12月頃、イスラーム宗教学校から選抜されてきた学生27人が武装訓練を行っていた」とのことだが、どこの学校なのか詳細は記されていない。

23) 『“東突”分裂主義勢力研究』p.162によると、この事件とほぼ同じ頃の1991年8月、「東トルキスタン・イスラーム改革党」は北新疆イリの「東トルキスタン・イスラーム党」のリーダーであ

籍のウイグル人アタハン〔Ataxan〕に、国外で武器弾薬を調達するよう7万5千元をカシュガルで手渡した。アタハンは同年同月末、パキスタンから7丁の拳銃と180発の実弾をテレビや扇風機の中に隠して密輸した。

1992年春節にあたる2月5日夜9時半頃、ウルムチの52番及び30番の路線バスに時限爆弾を仕掛け、3人が死亡、4人が重傷を負う無差別破壊行為を行い、同日やはりウルムチ市内の劇場や住宅で時限爆弾を爆発させようとしたが、こちらは公安に撤去され未遂に終わった。この時の主犯はイミット・タリプ〔Yimit Talip〕（アブリミット・タリプとも）とイディリスハン・ウメル〔Idirisxan Ömer〕で、実行者はメメット・セイット〔Memet Seyit〕らであった²⁴⁾。

1992年7月、上述イミット・タリプとオブルカスィム・イブラヒム、さらにイルハム・ミジット〔Ilham Mijit〕らがクチャ、シャヤル、カグルックで逮捕された。さらに同年8月12日夜イディリスハンら7人は、カグルックからパキスタンに交易に行くバスに乗り込み国外逃亡を図ろうとしたが、国境を越える地点で中国の武警や解放軍兵士との間で銃撃戦となり、結局2人がその場で死亡、残りは取り押さえられた²⁵⁾。

一連の事件に詳しいイスラーム宗教者アブドゥレヒム・アブドゥラシット（注の部分に彼のバレン郷事件に関する証言を添付）によると、同組織は1993年6月15日にはカシュガルのボスカム県で、新疆ウイグル自治区共産党委員会書記宋漢良（当時）を狙った橋梁爆破事件をおこし²⁶⁾、「これが実質的に、同組織の最後の反政府活動だった」という。「彼らは、南疆を視察する宋の車を、橋を渡る地点で橋ごと爆破して殺害する計画であったが、時限爆弾が炸裂したのは宋が橋を渡って6分経過してからだった。爆弾は手作りで火力が弱く、橋も大した損壊を受けなかった。この橋梁爆破実施と同日、カシュガル地区カグルック県では、同県公安局政治部（注：政治犯を管轄する部署）の公安警察ジュレットが食堂で食事をしている時、店の外に停めた公安局のバイクが爆破された。それは公安が市内巡視などに使う2人乗りのバイクだった。カシュガル中心部では同日、東トルキスタン・イスラーム改革党の中の穏健派がデモを行っており、同日に起こったこれらの事件は組織的

るヌル・メメット〔奴爾・買買提 Nur Memet〕に、爆薬や雷管を入手し、活動経費を集めるよう指示を出していたという。つまり、彼らの活動はすでに南新疆を超え、新疆全土にネットワークを持つ程に広がっていたようだ。

24) 『中国新疆歴史と現状簡読本 新中国時期分裂与反分裂闘争』pp. 60-65 にはこの時に破壊されたバスの写真が掲載されており、同年に起こった「シャヤル県農業銀行50万元武装強奪事件も、東トルキスタン・イスラーム党が起こした」と記載されている。

25) 『国家利益高于一切 新疆穩定問題的觀察与思考』p. 62 によると、「公安の追跡分隊が当地の遊牧民及び関係部門と密接に連絡を取り合い」「武警部隊、武警交通2総隊、新疆軍区陸軍航空団の支援」の下、逮捕をした、とある。

26) 「東トルキスタン・イスラーム改革党」の一連の活動についての記述は、『国家利益高于一切 新疆穩定問題的觀察与思考』pp. 60-80 が最も詳しいが、同著にも他の書籍にも管見の限りこの宋漢良暗殺未遂事件については触れられていない。

計画的で連動的だと公安は判断して、全国一斉捜査が行われた」。

V 中国政府の事件への対応と公式見解

ウイグル人の諸証言ではいずれも、バレン郷事件の準備期間はごく短期間だったと結論づけているが、中国公安当局は、バレン郷事件首謀者ザイディンが1987年から89年までの間、農閑期になると頻繁にカシュガル地区カグルックの著名なイスラーム宗教者モッラであるアブドゥルハキム・マフスムを訪問していることを重視し、「事件の背景にはアブドゥルハキム・マフスムと『エイサ集団』がいて、蜂起はこのイスラーム宗教者のネットワークを利用し2年間の準備期間を経て行われた」（『新疆通誌 20 公安誌』「東突厥斯坦国伊斯蘭党基本概況」p. 346）と断定する。「アブドゥルハキム・マフスムは中華人民共和国成立の頃、エイサ・アルプテキン分裂集団から新疆潜伏の任務を受け、1954年にはホタン県アブドゥ・イミットをリーダーとする反革命動乱に関与し、59年にもカグルックなどで反革命活動を行い、禁固20年の判決を受けた。釈放後の1985年にサウジアラビアへメッカ巡礼に行ったが、その際エイサ・アルプテキンと面会や密談に成功し、以来エイサとは密接な関係を維持しつつ、個人で建設したモスクで若者たちを教化していた」（『新疆通誌 20 公安誌』「東突厥斯坦国伊斯蘭党基本概況」p. 346）と当局は見ていた。

「エイサ」とは、中華民国国民政府の新疆省官僚で、中国共産党の新疆「解放」と同時に、大勢のウイグル人を率いて新疆からインドへ逃れ、そののちトルコに政治亡命を果たしたウイグル人エイサ・ユスブ・アルプテキンのことで、「エイサ集団」とは、ウイグル人亡命者のリーダーとして活躍したエイサを支持した在外ウイグル人に中国共産党が貼ったレッテルである。アブドゥルハキム・マフスムは、1985年メッカ巡礼の旅の途上サウジアラビアやトルコを訪問し、そのときに在外ウイグル人と親交を結び、情報交換を行っていたとされる。しかしながら、電子メールもインターネットもなく、国際電話さえもままならなかったこの時代の中国で、ましてや新疆の片田舎で発生したバレン郷事件の主犯がトルコ在住のウイグル人亡命者たち～「エイサ集団」であるとの中国政府見解は、あまりに無理がある。更には事件発生年、エイサはすでに89歳の老人であった。

バレン郷事件発生から4日後の1990年4月9日、武警総部は4月5日に落命したアクト県边疆防衛大隊の許新建、王景平、蘆建輝、郭学文の4人に「革命烈士」の称号を与え（『新疆通誌 20 公安誌』「烈士名録」p. 733）、同年6月5日には追って彼らに「辺境の衛兵」との称号も与えた。同様に公安部は、5月21日バレン郷反革命武装暴乱の鎮圧に突出した貢献をしたとして、クズルス・クルグズ自治州公安局長の陳鋭韶とアクト県公安局副局長のウイグル人アバベク・オスマンに、「中国に於いて第一級の英雄的で模範的な公安警察官」との称号を与えて慰労し、6月1日には「この2人に学ぼう」とのキャンペーンを展開した（『新疆通誌 20 公安誌』「英模名録」p. 737）。

新疆ウイグル自治区共産党委員会書記（当時）宋漢良は事件を総括して、同年4月21日に自治区幹部大会の席上で経緯報告をした。宋漢良は、「今回の反乱を鎮圧するにあたっ

て、最初から最後まで党中央、國務院、中央軍事委員会の正しい指導と関心及び指示を得た。反乱が起きてから江沢民総書記そして李鵬首相、軍事委員会の劉華清副主席など中央政府の指導者同志たちがその反乱を鎮圧することを重視し、深い関心を寄せてくれた。反乱鎮圧の途中、決定的な瞬間や、鎮圧後に彼らはそれぞれの関係機関を通じて、或いは自ら自治区党委員会および南新疆軍区指導部に複数回電話を入れ、私達に対して中央政府が解決すべき難しいことがないか聞いてくれた。そして反乱を鎮圧させるにあたって 貴重で重要な指導を随時、出してくれた」と、鎮圧には党中央の深い関与があったことを強調している（『新疆通誌 20 公安誌』『東突厥斯坦国伊斯蘭党基本概況』p. 346）。

事件から2年後の1992年5月28日、クズルス・クルグズ自治州中級人民裁判所は、アクト県で見せしめの為に県民500人を集め、バレン郷事件に関与した容疑者たちへの公開裁判を開き、スレイマン・スピ〔Süleyman Supi〕、クルバン・メメット〔Qurban Memet〕、オブル・アリ〔Obul Ali〕等にその場で死刑判決を下して即時執行した（『新疆通誌 20 公安誌』『大事記』p. 85）。

おわりに

バレン郷事件は、1989年第二次天安門事件の後、1991年ソ連解体前の時期に発生した。ソ連解体後の中央アジアでは、テュルク系民族を主体とする国が次々に独立し、中国領域内のウイグル人の総数より人口が少くないテュルク系民族の国家も誕生していく。こうした時代性もあって1980年代から90年代の新疆や中央アジアでは、「東トルキスタン」や「ウイグルスタン」の名を冠したウイグル人による反政府地下組織が数多く生まれた。

バレン郷事件以降のウイグル人による反政府運動は、いずれも軍と武警を総動員し、徹底的に武力鎮圧することで収束させている。中国政府は1997年新疆グルジャ〔イリ〕で発生したウイグル人による反政府運動「グルジャ事件」も、バレン郷事件と同様、人民解放軍・武警・兵団など全軍を投入して鎮圧した。1997年は鄧小平が亡くなり、香港が英国から中国に返還された年でもあり、中国共産党は政治が乱れ国土が分裂するかもしれないとの危機感もあって、グルジャ事件への制圧も苛烈を極めた。

バレン郷事件が在外ウイグル人にもたらした影響は甚大だった。1992年トルコのイスタンブールで開催された「東トルキスタン民族会議」は、1950年代に政治亡命したウイグル人たちがバレン郷事件発生の知らせを知って驚愕し、会議を招集したものである、この会合が現在活動している在外ウイグル人国際組織「世界ウイグル会議」を結成するきっかけとなった。バレン郷事件は結果として、在外ウイグル人の民族主義や独立志向を覚醒させ、彼らの政治活動に大きな転換点をもたらしたのである。

バレン郷事件に関する比較的新しいラジオ・フリー・アジアの報道を、ここに記しておく。「1990年4月15日に、バレン郷事件に関与したとして逮捕され、22年の間監獄にい

たメヘット・ハサンが、2012年2月14日獄中死した」²⁷⁾。インタビューの中でメヘットの妻アスムハンは、「夫は獄中で栄養失調死した」と答えている。さらに記者は、「バレン郷事件に連座して無期懲役の判決を受けたウイグル人10名のうち、既に半数が刑務所で死亡している」と指摘した²⁸⁾。バレン郷事件発生から今年まで既に20年以上が経過しているが、中国政府はこのようにバレン郷事件関係者らウイグル人反政府活動家に対しては、一貫して強硬な態度をとり続けている。

中国で刊行された諸資料とウイグル人亡命者側の記述や語りでは、当然ながら大きな齟齬がある。どうしても亡命者側は自らの民族の悲惨な運命を同情心に訴える伝え方をし、中国共産党側は「反政府組織」側の暴力性や非近代性を強調し、政権側の正当性を主張する傾向がある。さらに事件発生当初、大々的に報道管制が敷かれていたので、漢人・ウイグル人・外国人を問わず、記者が当事者への取材を丁寧にした形跡はなく、中国政府の公式見解と、旅行者による不正確な噂話が、情報が無いゆえに世界を巡ることとなった。現在では当事者は殆ど亡くなっており、生きていても獄中であって証言できる環境にはない。辛うじてウイグル人関係者に取材をしたウイグル人ジャーナリストのニザミディンさえ鬼籍に入っていることから、諸資料検証に基づく実証的な手続きは困難を極める。ゆえに、本稿で記した内容はバレン郷事件のあくまで「一断面」であることを強調し、将来的に何らかの資料が公開され、再度検証が行われることを願ってやまない。

*本稿は、文科省科研基盤研究C「中国新疆に於けるウイグル人の反政府運動と在外民族

27) RFA ウイグル語放送 HP 2012年3月12日付記事によると、「1990年バレン郷事件後に逮捕され無期懲役の判決を受けたウイグル人10名のうち、半分为刑務所で既に死亡している」という（最終確認2012年3月14日）。http://www.rfa.org/uyghur/xewerler/tepsili_xewer/barin-olgen-03122012163430.html

同記事の放送音声リンク→

http://www.rfa.org/uyghur/xewerler/tepsili_xewer/barin-olgen-03122012163430.html/u0312-pmt.mp3/inline.html

28) RFA ウイグル語放送 HP 2012年3月14日付記事では、バレン郷事件後に逮捕され、中国の刑務所で死亡した5人の氏名を公表している。（最終確認2012年3月15日）

http://www.rfa.org/uyghur/xewerler/tepsili_xewer/barin-weqesi-03142012173814.html

同記事の放送音声リンク→

http://www.rfa.org/uyghur/xewerler/tepsili_xewer/barin-weqesi-03142012173814.html/u0314-pmt.mp3/inline.html

音声要約：バレン郷事件から22年。無期懲役などの刑を受けた者のうち、メヘット・ハサン [Mehet Hesən], エメット・アフン [Emit Axun], ジュメ・カリム [Jume Qarim], トフティ・カリム [Toxti Qarim], アリムジャン・メメット [Alimjan Memet] が既に獄中死し、トゥルスンアユム・エメット [Tursunayum Emet], ジャマル・ムハンメット [Jamal Muhemmet], トウルグン・ホジャ [Turghun Xoja], ヌル・カディル [Nur Qadir] らが現在も獄中にいる。

組織との関連性についての研究」の研究成果の一つである。

(みづたに なおこ・中央大学経済学部兼任講師)

【参考文献】

・中国語

- 阿克陶県地方誌編纂委員会 (1996)『阿克陶県誌』新疆人民出版社
- 新疆维吾尔自治区地方誌編纂委員会 (2004)『新疆通誌 20 公安誌』新疆人民出版社
- 新疆维吾尔自治区党委員会政策研究室課題組 (2010)『新疆貧困状況及扶貧開発』新疆人民出版社
- 中共新疆维吾尔自治区委員会党史研究室 (1993),『新疆反对民族分裂主義闘争史話』新疆人民出版社
- 中共中央文献研究室 (2010)『新疆工作文献選編集 1949-2010』「国务院特区弁公室 关于印发《討論新疆開放工作紀要》的通知」(1988 年 1 月 5 日) 中央文献出版社
- 続西発 (1995)『中国少数民族計画生育概論』新疆人民出版社
- 張秀明 (2009)『新疆反分裂闘争和穩定工作的实践与思考』新疆人民出版社
- 潘志平・王鳴野・石嵐 (2008)『“東突”的歴史与現状』民族出版社
- 馬大正 (2002)『国家利益高于一切 新疆穩定問題的觀察与思考』新疆人民出版社
- 馬大正・許建英 (2006)『“東突厥斯坦国” 迷夢的幻滅』新疆人民出版社
- 厲声 (2007)『中国新疆歴史与現状簡読本 新中国時期分裂与反分裂闘争』新疆人民出版社
- 李琪 (2004)『“東突” 分裂主義勢力研究』中国社会科学出版社

・ウイグル語

- WUC [世界ウイグル会議] (2005)『Barin Inqilawining 15 yili [バレン革命の15周年]』Teklimakan Uyghur Neshriyati [タクラマカンウイグル出版社 *在トルコ ウイグル語]より, Nizamudin Yuseyin [ニザミディン・ヒュセイン]「Barin Weqesi [バレン郷事件]」pp. 69-86

・日本語

- 楠木賢道 (1992)「私の新疆見聞録 (一) 一九九〇年四月のアクト県バレン郷の事件をめぐって」『歴史と地理』第 441 号 山川出版社
- 新免康 (2001)「ウイグル人民族主義者エイサ・ユスブ・アルプテキンの軌跡」『現代中国の構造変動 7』東京大学出版会

・インターネット記事

- 伊利夏提 [イリシャット] (2011)「尼扎穆丁・侯賽因－維吾爾知識分子的楷模」博訊熱點『新疆問題』
<http://boxun.com/news/gb/pubvp/2011/08/201108100619.shtml>,
2011 年 8 月 10 日, 最終確認日 2012 年 3 月 15 日